

商工經濟研究

第二卷 第四號

(昭和二年
十月十五日發行)

社會の進化と我國體 (一)

清水谷隆寛

本稿は今夏高松高商講堂に開催された文部省主催の成人教育講座に於て試みた講演の概要である。近時思想の變動に伴ひ、日本の社會に於てもこれが急激なる變革を企つるものを生じた。そうかと思ふと一方では、そのよつて來る所をも究めず、唯々危険なりとして徒らに彈壓を加へむとするものもある。勢の越く處事態は益々危険に類しつゝある本講は社會の急激なる變革が必ずしも社會全體の爲めに有利ならざること明かにすると同時に、徒らなる彈壓の不可なること、日本社會の健全なる發達の爲めには、國家の社會化、社會の民衆化の必要なることを示さむとするものである。元より通俗を旨とする講座のごとである、本誌の讀者には必ず不満足のものなることを信ずるものであるが多忙の際稿を改むる暇もなく、講演のまゝを録して責を塞ぐことにした。杜撰なる本稿が少しなりとも讀者の研究の助となり。又は實際生活に於ける讀者の行動の指針ともならば望外の幸である。

社會といふ言葉は今日の吾々の日常の用語の中でも最もポピュラーなるものゝ一つで、恐らくこれを口にしな

いものはありますまい。それにも拘らず、一步を進めて、社會なる語の意義如何といふことになると、これに對して明確なる答解を爲し得るものは極めて稀である。殊に我國の如き近時に至る迄國家あるを知つて社會あるを知らなかつた國民の間にあつては、特にその然るを感ずるのであります。依つて茲には先づ社會なる語の意義を明かにし、然る後に社會の進化に及ぼうと思ひます。社會には様々な形態があります。學校も社會なれば、會社も社會である。村落も社會なれば、都會も社會である。さりながら最も普通に社會なる語によりて表現せらるゝ物體は、一國を範圍とする人類の集團であります。本日皆様と一所に茲に研究せむとする社會も無論これを指すのであります。吾々はこれを一國の社會と名づけます。

難かしい説明は抜きにして、解り易く社會の正體を申上ますと、社會は丁度二重又は三重に積み重ねた重箱の中に藏められた御馳走のやうなものであります。御馳走は個人に相當します。重箱相互の區切りは階級の色別けに相當します。重箱そのものは國家に相當します。一國の社會といふものは、階級といふ色別けによつて一應まとめられた人類を、更に國家といふ制度によつて締めくくつたものであります。それならば社會と國家、社會と階級、社會と個人とは如何なる關係に立つか。この關係を明かにすることは社會の正體を知る上に極めて重要なことであります。

自由主義、個人主義の見解によると、國家は社會といふ個人の集合體を守護する機關である。國家主義、保守主義の見解によると、國家は社會と同一又はそれ以上のもので、それ自身獨立の存在と權力を有する。社會主義

無政府主義の見解によると、國家は特權階級が自己の地位を擁護するための制度である。惟ふに國家は自由主義者のいふが如く單なる社會の番犬ではない。國家はそれ自身に機能を有する一組織であつて、社會を調整するを以てその任務とする。併し、どこまでも社會のための機關である、制度である。自ら社會全體を代表するものでもなく、無論人民を統御する神授の權力を有するものでもない。又、社會主義のいふ如く階級獨占のための制度でもない。國家は社會のための制度であり、社會の結合を支持するための制度であります。前に重箱の例を挙げたが、更に一例を擧げるならば、地殻と地球との關係がこれに相當する。地球が地殻に包まれるやうに、社會は國家に包まれる。地球が地殻によりて限られるやうに、社會は國家によりて限られる。地球の内部には絶へず火熱が活動して地震や噴火を惹起す。社會の内部には生きむが爲めの争闘が行はれて、社會を動搖させ、革命を惹起する。地震は空隙を充すが爲めに起り、噴火は壓迫に對抗して起る。故に若し社會を革命の不祥事より免れしめむと欲せば、徒らに國家の舊型にとらはるゝことなく、内部の活動に應じて自由に之を變革せしめねばならぬこれが社會を不祥事より救ふ唯一の方法であります。

社會と階級との關係については、社會が組織されると、必ず階級が編成される。社會の秩序は階級の上に置かれることを述べれば足りる。今日の階級は昔の階級のやうに身分階級ではないが、今日の世の中にも矢張り階級は存在する。そしてそれは經濟的、所得的のものであるが故に學者は之を社會階級と名づけます。何れにするも階級を異する人々は地位や境遇を異するところから、自然に利害や關心を異し、又精神や感情を異して、そこに

當然に階級意識が発生し、階級利益が自覺される。かくして各階級は各々自己の階級の利益の爲めに社會組織なり、社會制度なりを改めむとする。こゝに階級鬭争が発生する。併し利害は何事につけても常に相反するものではない。故に一面には鬭争を行ひつゝ、他面には融和し協働する。かくして社會は構成され維持され、發展する。それと云ふのも社會には共同の目的があり、共通の利害が在るからであります。若し吾々が社會の目的を意識するならば最早無用なる鬭争は起らなくなるでせう。併し鬭争は全然無用だといふのではない。鬭争の眞の職能は協働の新らしい形態を生み出すにある。故に鬭争を鎮壓しても唯それだけでは進歩とならない。共同の目的、共通の利害の下に統制せられてこそ進歩となるのである。昔から角を矯めむとして牛を殺すと申しますが、階級を無くしやう、鬭争を鎮壓しやうといふ考は正しく牛を殺すの類であります。

最後に社會と個人との關係を申しませう。個人はさながら水滴の如く、社會はさながら水のやうである。水滴を離れて水はなく、水を構成せざる水滴はない。個人の協同組織が社會であり、社會組織の産物が個人である。社會と個人との關係は次のやうにも表はされる。社會は鏡であり、個人は顔である。顔を表現するには鏡によるの外なく、鏡は顔を寫すことによりて其目的を達する。社會と個人とは同一物の異なる兩面である。併し一體としての社會の中には、個人の中に見られざる何ものかがある。これが獨立の存在と目的と活動とを持つ社會である。そこに社會の統一があり、社會の組織がある。かくして社會の中には個人と異なる様々な集團が生じ、社會は集團的に組織される。故に社會の本體を知るには、個人的方面よりこれを見ると共に、更に集團的方面よりこれ

を觀察するの要がある。とまれ、社會にも個人と同じく自利利他の二面がある。自利は私利であり争闘である。利他は公益であり協働である。均衡のとれた人、衝動の調和された人を人格者といふが如く、各階級の間に統一調和の保たれる状態、社會の秩序が均衡を保つ状態を正義と名ける。正義が個人的にあらはれたるものが人格であり、人格が社會的に現はれたるものが正義である。個人と社會とは觀察の方面を殊にする同一事物の兩面であります。

二

社會の正體が何たるかは、以上に於て畧御了解を願つたものと思ひます。次には進むで社會は進化するかどうか、進化するとすれば如何なる過程を辿るか、如何なる力がこれを進化せしむるかといふことを御話致し度いと思ひます。

私は先般當地へ参ります際に一寸郷里へ立寄りました。昨年夏も参りまして、その間は僅に半年であります。その短かい間にも人が死ぬ。生れる、家が建つ、道路が出来る、實にその變化の大なるに驚いた次第であります。田舎の都會でもかやうな有様である。況んや東京とか大阪とかいふ大都會に於ては、僅に數日の間にも大變化が有りました、たまたに都會に出る吾々はいつも驚かされるのであります。兎も角世界は一刻も靜止しない。孔子は萬物生々變化してしばらくも息むことなしといひ、ヘラクリトースは萬物流轉すると申しましたが、眞にその通

りであります。同様の考は之を佛教にもとめることが出来ます。佛教では因果といふことを申します。私は日本に生を享け、唯今恚うして皆様と御話しをして居ます。佛教によりますと、私が日本に生を享けたと云ふこと。此處で皆様と御話しして居るといふこと、否私が住むで居るこの世界迄も過去に於ける私の業因の結果であります。同様に現世に於ける私の所作が原因となりて未來の生と世界を生む。これが因果思想の生み出した輪廻説であります。その正否はしばらく之を措く。宇宙萬物の變化することは佛教の認むる處であり、昔の哲人の等しく認められた處であります。無論今日の科學もこれを認めます。それが進歩であるか退歩であるかは解らないが、宇宙の進化することだけは疑がない。宇宙現象の一たる社會現象が進化することは最早疑がありません。

兎も角社會は進化する。然らば進化の過程は如何。これを支配する原理は如何。これが次に起る問題であります。

近世に於ける進合理論は大畧二種に分れる。一つは宇宙の進化より社會の進化を論ぜんとするもので、ヘーゲルに始まりマルクスを大成者とする。他の一つは生物の進化より社會の進化を説かむとするもので、スペンサーを代表者とします。

ヘーゲルは何人も知る如く、十九世紀の初頭、獨乙に現れた哲學者であります。彼は歴史の研究により思辯法又は辯證法と呼ばれる一種の論理法を考案し、これを用ひて進化哲學と呼ばれる、彼れ獨特の歴史哲學を組立てた。彼れに従へば、宇宙一切の事物は悉く相反する二つのものゝ對立である。二つのものはそれが相互に争ふ間

に更に高きものに綜合せられて進化の過程を辿つて行く。例へば茲に唯物論者が現れて、宇宙の本體は物だといふ。この思想は必ず反對説を生むで、心だといふ。兩者はかくして相争ふが、前者が後者を否定し盡すとき、兩者は共に消滅して一新思想が現はれる。ヘーゲルは此の段階を正、反、合と名づけました。正、反、合は一切事物が不斷に進化する道程であります。

この説は一應尤もに聞える。殊にパークニンが革命の代數公式と批評したやうに革命にはもつてこいの議論であります。乍去ヘーゲルといふ學者は元々頭の中から何事をも割り出さむとした理想主義の學者である。爲めに折角考へ出したことも事實に即しないことが多く、結局、魂のない論理だといふ誹を免れない。

マルクスは近世に於ける偉大なる學者の一人である。學説に於ては其の師ヘーゲルと説を異にするも、辯證法だけはこれを探り入れて、唯物史觀と呼べる、社會革命の理論を建設した。

マルクスによれば、人類は、彼等の有する物質的生産力の一定の發展段階に應ずる生産關係に入り込むものである。こゝに生産關係といふは、生産に關與する人と人との關係である。工業に例をとつて見るならば、中世の同業時代に於ては、生産者相互の關係は親方、職人又は徒弟といふ關係であつた。今日に於てはこの關係は一變して、これと全く性質を異にする企業者對労働者の賃儲關係となつて居る。これが生産關係と呼べるものである。然るに生産關係なるものは、吾々の生れぬ前から社會の生産力の如何に應じて一定して居るものである。今日の生産關係は機械の發明に基く生産力の發展の結果として必然に起つたものである。故に若し吾々が父

母から相續せる何等の財産もなく、而も自分の生活を社會的に支へて行かうとするならば、吾々は自分の勞力を他人に提供して、一定の俸給なり賃銀なりを得るより他に途はない、これがマルクスの謂ふ「物質的生産力の一定の發展段階に應ずる生活關係に入り込む」といふ言葉の意味であります。斯様にして吾々は自分の意志から獨立して定められた一定の生産關係に置かれるのであります。然るに一旦生産關係が定まると、それと共に自ら之に應じた分配關係が出来て来る。そうして生産關係が吾々の意志から獨立して定められたやうに、分配關係も吾々の意思から獨立して定められるのである。それは兎も角、これらの生産關係と分配關係の全體を合せたものを社會の經濟組織と名づけれます。そして經濟組織が形の上に現はれたものが法律や政治の諸制度であります。マルクスの言葉を用ふるならば、經濟組織は社會『眞實の基礎』であつて、法律や政治は、この基礎の上に建てられた『上層建築』である。嘗に法律や政治許りでなく、宗教も哲學も藝術も一切の精神文化は、社會の經濟組織によつて條件づけられるのであります。この講堂を一例にとつて見ませう。この講堂を一つの社會だとすれば、經濟組織は土台に相當します。柱とか壁とか屋根とか云ふ建物大體の骨組は法律と政治であり、壁窓天井柱屋根等に施された裝飾、所々に用ひられた曲線等は道德宗教哲學藝術等の精神文化であります。一言を以て之を掩へば、物質的の生産力、従つて『物質的生活の生産方法は、社會的、政治的並に精神的の生活過程を條件づける』といふことが出来ます。しかし、これは土臺が原因で、講堂が結果だといふ意味ではありません。土臺の如何がその上に建てらるべき建物の種類を決定するといふ意味に外ならぬ。兎も角社會の物質的生産力が發展して來ると曾つ

てはその發展を助けた生産關係、その生産關係の發現に過ぎざる法律政治が却つて生産力の發展を害することになる。こゝに於て社會組織の改造が行はれます。尤も社會の改造は妨害の發生すると同時に行はるゝものではなく、生産力は妨害に對抗しつゝ尙發展を繼續する。さうして遂にその經濟組織内に於ては餘す處なく充分に發展し盡したときに新しい一層高度の生産關係が生れて来る。生産關係が變ればこれと表裏をなす分配關係も變はる。既に生産分配の關係が變ればこれを綜合したに過ぎない經濟組織も變つて来る。既に經驗組織にして變動せんか、これを形式に現はしたる法律も政治も當然に變つて来る。斯くの如くして社會關係は悉く變化する。社會關係が變れば社會を支配する宗教道德藝術哲學等の精神文化も之に伴つて變化する、又變らざるを得ない。これがマルクスの社會進化論の概要であります。この説には多くの眞理が含まれて居る。さりながら社會を進化せしむるものは單に物質の生産力のみであらうか。マルクスにはこの外にこれと不可分の關係に立つ階級闘争説がある。社會を動かすものは生産力であるが、これを助けて社會を變動せしむるものは階級の努力である。如何に生産力が變動してもこれに伴ひて社會が變動するには、社會内に於ける多數の人々の助力に待たなければならぬ。特に現在の社會組織の下に於て不利益の地位にある階級が先に立つに非ざれば社會の變策は成し遂げ得られなからである。かやうに見來ると社會を變動せしむるものは單に生産力に止らない。人の力も又その一として數へ擧げられねばならぬことがわかる。尤もマルクスも階級闘争は過去及現在にのみ存在する。將來の社會に於ては唯生産力のみが社會を發展せしむるといふ。併し生産力を變動せしむるものは又人ではないでせうか。詳しい

ことは後に譲るが、少くも人の力が社會組織を變動せしむる重要な力なることは確かであると思ひます。

二つの學説にはその一つ／＼に就て見るも以上のやうな缺點があります。では宇宙進化の法則から社會進化の法則を發見せむとする抑々の考には誤りはないでせうか。天文學者は天體が衝突して星霧となり、星霧が凝集して天體となるといふ。又宇宙一切の現象には自ら何等かの體系があるといふ。果してこれは眞だらうか。假りにこれを眞とするも天體を支配する法則が直に人間を支配すると見ることが出来るか。こゝにも幾多の難點を藏して居ります。

三

次に、生物進化の法則から社會進化の法則を誘き出そうとするスペンサーの學説を紹介いたします。ヘーゲルより少し遅れて英國にダーウキンといふ學者が生れました。ダーウキンの學説は特にこゝで述べたてる迄もなく皆様の御存じのことであるが、一言を以てこれを現せば自然淘汰と云ふことになる。自然淘汰とは優勝劣敗、適者生存を意味します。スペンサーは生物の進化に關するダーウキンのこの法則を採り入れて社會の進化に關する自己の學説を作り上げたのであります。それは事物の進化は無機體に始まり、有機體の生物を経て、超有機體ともいふべき社會に至るといふのであります。その眞偽を吟味するに先ち、生物の進化は一體どういふ具合に行はれたか、それを一通り調べることにいたしませう。

或る生物學者は人類はアミーバから進化したと申します。そして其證據として澤山の事實を擧げて居ます。第一に胎兒はその形成の初めから出生時まで様々な動物の形態を經過します。最初は單細胞動物の形態を採り、次には蠕蟲類、次には魚類、次には兩棲類、次には爬蟲類、次には四足獸類とかうした順次にこれらに近い形態のすべてを通過する。これは人類が幾千萬年の長い進化期間に會つて經過せる動物種屬を母胎内に於て順次に繰り返すのだと申します。又人類には種々の不用器官の痕跡が残つて居ます。耳を動かす爲めの筋肉の遺跡——

單に遺跡許りでなく多數の人類の中には今日尙耳を動かし得る者が相當に澤山あります。——尾の痕跡たる尾椎骨、其他盲腸、稀に妊婦に見る二對三對の乳房、此等は其の顯著なるものである。然るに他面に類人猿には既に久しい以前から尾がない。盲腸も初期の人間の胎兒のものは畧腸と同じ太さであるのに成熟せる類人猿の盲腸は人間と同様退化して居る。これらも證據の一として擧げられます。今日の生物學では、人間と猿とは同一祖先から生れ出たものとされて居ますが、劣等人種と高等猿猴類の間には多くの類似特徴があります。例へば、皮膚の色の黒いこと、腕の長いこと、腹部の巨大なこと、身長の短いこと、足指に攫力の殘存してゐること、前方に突出した巨大な顎、後に引込むだ小さい顎、腦重の少いこと、此等がそれでありませう。序に申上ますが人類學では鼻下と耳とを通ずる線と鼻骨と顎とを通ずる線の狭む角の大小によつて人類進化の程度を卜して居ます。此等の様々な事實から人類はアミーバから進化したと申します。以上は人類に例をとりましたが生物は一般に單純から複雑へ、同質から異質へと進化する。そして之を支配する原理は自然淘汰であると申します。

生物の進化に關する以上の法則は其後各方面の研究によりて漸次に眞理に近づきつゝあります。然しまだ多くの疑問がある。何しろ地球の地殻が出来たのは地質學者の説によると今から一億萬年も前のことである。生物もこれと畧同時代に、海水がその生存に適する程度に冷却したとき發生したものゝやうです。人類に至つてはずつと新らしくなるが、それでも二十萬年乃至五十萬年前には既に原人の棲息したことが立證されて居ます。ところが歴史の考證の届いた處はその中僅かに六千年である。それも眞んとうに明瞭な處は果して幾年ありませうこの貧弱な知識を以て永い生物の進化を論じ人間進化の跡を辿らうとして居るのです。學者の努力に拘らず其の結果の不確なることは言ふ迄もありません。假りに生物學者の言ふ生物進化の法則に誤りなしとするも、これを人間社會に應用することは果して適當でありませうか。人間社會は動物社會の發達したものであつて、全然別種の起源を有するものではない。さりながら一度人間社會が成立するとその進化は最早動物社會のそれと同一でありませぬ。それは何故か。動物の社會では生理的分子が社會結合の主なる要素たるに反し、人間社會では心理的分子が主なる要素となつて居るからであります。といふのは動物社會にも心理的分子はあるが、動物社會に於ては心理的分子としては單に本能と感情があるに過ぎないのに、人間社會に於てはこの本能は習慣となり、感情は情操となり更に觀念や推理がこれに加つて居るからであります。従つて動物社會の進化、もつと一般的について生物の進化は主に先天的體質特徴の發達、解り易く云へば生理的進化であつて、漸化、變種、遺傳、淘汰等の過程を経て自然環境に適應しつゝ遂行される。高等動物にあつては少からず心的要素が之に關連しますが併しそれは本

能的であり無意識的であります。一般に生物進化は、植物は勿論、動物に於ても大部分無意識的に發達するのであります。人間社會の進化は之に反して主に意識的であります。人間は豫め目的を定め方向を決定して自發的に社會をこゝに導きます。社會生活の表現たる文化が發達するのは全くこれによります。而も文化が發達すると之が原因となつて物的進化が起ります。社會進化に於ては物的進化は寧ろ心的進化の結果として起る副産物であります。かやうに見來ると、宇宙の進化より社會の進化を説かむとする説にも、又生物の進化より社會の進化を説明せんとする説にも夫々缺點のあることが解ります。とは云ふものゝ兩説には多くの眞理が含まれて居ます。これを外にして社會の進化が説明され得やうとも考へられない。眞理は恐らくは兩者の中間に横るのであります。では兩者は何處迄が正しく、又如何なる條件の下に是認さるべきであるか。以下順次に之を吟味して各説の有する夫々の價値を明かにいたしませう。

先づ第一は進化の過程であります。マルクスによると、社會は革命によつて進化する。革命には階級闘争がつき纏ふ。進化の過程は時々起る革命によつて中斷されるが、革命より革命に至る期間は兎も角も續いて進んで行く、即ち中斷的周期的且つ階級的である。スペンサーによると社會には個人の自由が中心となつて自由競争が行はれる。社會はこれによつて有機的に進むて行く。故に進化の過程はしばらくもとぎれることなく一段々々と昇つて行く。即ち連續的漸進的且個人的であると。惟ふに社會は革命的にも漸進的にも、將又階級的にも個人的にも進化の過程を辿り得るものであります。丁度賽ころの振り方如何によつて同一の双六にも色々の廻り方やとび

方のあるやうに。併し社會は自然のまゝに放任して置いて進化するとも限らず、又革命があつたから進化するとも限りませぬ。結局どちらの説も半面の消息を傳へるに過ぎないのです。事實でもあり事實でもなく、眞理でもあり眞理でもないのです。然らば如何なる事情の下に社會は革命的に進化し、如何なる事情の下に漸進的に進化するか。社會が政治的にも經濟的にも獨裁的に組織され、少數の人々若くは一階級の下に社會が無理に統一されて居る場合には、その社會は革命的に變革する。而もその結果は唯獨裁者が變つたといふだけで、獨裁的社會若くは階級的國家は依然として存続する。これに反し社會が民主的に組織せられ、政治も經濟も一切の階級によつて支持されて居る場合には、その社會は一體として改革的に進化する。吾々は寧ろこれが典型的であると信ずる。しかし典型的であるからと云つて、自然に放任して置いて、この進化が實現されるといふ譯ではない。社會が改革的に進化するには何時も自覺の發生と理智の發達とを必要とする。徒らに情意のみ發達して理智を缺ぎ、一體としての社會目的、社會の一員としての自己の任務に自覺なき社會は自然に獨裁的に推移する。かゝる社會に於て不利益の地位にある民衆の間に自己の地位に對する自覺と闘力が發生すると、そこには多く暴力革命が勃發する。理智のみが發達し情意を缺ぐ場合もこれと同様である。だから知情意が均衡を保つといふことゝ、人が一體としての社會目的と社會構成の一員としての自分の任務とを充分に覺るといふことが何よりも必要事である。然るに過去に於ては圓滿なる知情意の發達もなく、また自覺も無かつたが爲めに宗教上、政治上、經濟上に於て或る階級が獨裁を行ひ、これが爲めに度々革命が起つたのである。幸にも昨今の文明社會には各階級の利

害と意思とを代表する民主的の組織や制度が發達して來た。これが巧く行くならば今後の社會に於ては革命は發らなくすむかも知れませぬ。階級闘争による血なまぐさい革命と、勞働階級の獨裁を叫んだマルクスさへその晩年には、民主的國家に於ては勞働階級の目的は平和裡に達せられるだろうと説いて居ます。吾々はかくあることを望みます。併しかくあるが爲めには前にも云つたやうに一體としての社會の目的が自覺せられ、この目的の達成の爲めに各階級の間には協力が行はねばなりません。私は、人々がこの自覺に到達し、協力して社會の改革的進화에貢獻せむことを切望致します。

次には進化の動力であります。マルクスは物の生産力を以て社會を動かす力と致します。これは社會を以て物質の産物となす考であります。等しく宇宙の進化から社會の進化を説かむとするものゝ中にもヘーゲルはマルクスと違つて人の精神力殊に國民の精神力が現はれて歴史を造ると申します。これは社會を以て人間の産物とする考であります。スペンサーは經濟學の元祖アダム・スミスと同じやうに自然の力が社會を進化せしむると申しました。唯スミスに於ては、自然力は人に自然に備はる利己心であり、スペンサーに於てはそれは、生物が自然に有する生成力であります。何れにするも自然力が社會を發展せしむると説くのでありますから、これは社會を以て自然の産物と見る考へであります。第一を唯物史觀、第二を唯心史觀と名づけます。第三に對しては別に定まつた名稱はありませんが、強いて名づけるならば自然史觀とでも申しませう。兎も角、都合三つの見方があるのであります。この中何れの見方が正しいのでありませう。

元來人間には物心の両面があります。物といふのは肉體のことです。吾々にはこの肉體あるが故にこれから物質的欲望が生じ、これが外界の物資の上にはたらいて社會は進化し發展します。所謂物質文明の發達であります。吾々には心があります。これから様々な精神的意欲が生じます。その中利己的なものは主として物質的欲望と合體して物質文明の發達に貢献しますが、その利他的なるものは道德的感情として人間相互の間にはたらし、それによりて社會は進歩します。精神文化の發達がこれです。しかし社會を進化せしむるものは唯これに止りませぬ。物質的欲望が外界の物質にはたらいて發達せしめたる生産力は更に逆人間社會の上にはたらいて社會を變革いたさせます。社會の發達には三つの力のすべてがはたらくのであります。而もその間には何等の經重も無く又本末主従もありません。それは何故か。一には人間に物心の両面があり、従つて社會にも物心の両面があるからであり、二には物質文明と精神文化とが相互に因果關係をなすからであります。

かやうに見來ると、何れの説にもそれ／＼の理由がある、併しそれは唯半面の眞理である。人の正體を知るには一體としての人間を知る必要がある如く、社會の正體を知るには一體としての社會を知る必要があつたのである。然るに彼等は唯その一面を見るが故に、各一方に偏した學説を唱ふるに至つたのである。進化の過程についてもその動力についてもその全體を見ることにより初めて正當なる見解は生れて參ります。然らば何故にかやうな見易い道理が今迄發見されなかつたか。理由は簡單です。それは社會が分化したからである。曾つては一現象として統一されて居た政治、經濟、法律、道德、宗教等の諸現象が今日に於てははつきりと分化され、各々はさ

ながら別社會の如くに、そこには夫々別々の思想や理論が發達して居る。かやうな譯で社會の各場面はすべて同一の目的を持ち乍らそれが不明であるが爲めに、各自に別々の目的ありと信じ、各自別々の行動をとる。こゝに矛盾や撞着が生ずる。よくかやうなことを申します。國家全體の利益からしてはこの案に賛成することは面白くない。即ち一國民として又は一市民としてはよろしくないと思ふが、政黨の一員としてはそれが黨勢擴張の手段なるが爲めに己むを得ない。即ち悪くない。或は、人を欺くことは人間としてよろしくない。併し國民として國家の爲めに敵人を欺くのは差支へない。一市民としては隣人を愛すべきである。併し實業家としては隣人を陥れても構はないと。一人の人間の踐むべき道にかやうに幾通りかある筈はない。道は唯一つであるべきである。それにも拘らず、かやうに幾通りもある如く見えるのは、社會が分化して複雑となり、社會の各場面が宛も別個の社會をなす如く見ゆるからである。そしてその場面がその時代の社會に於て優越の地位を保ち、重要な役割を演ずるときには、主としてその場面を動かす力が社會全體を動かす力なるが如く考へられるからである。そこで學者迄もこの外見に幻惑されて、政治、經濟、道德、宗教等夫々の場面に獨立の存在を與へ、或る場面が時代の社會に於て優越の地位を占むる場合にはその場面を動かす主なる力を以て社會進化の動力となすに至つたのであります。所謂唯心史觀とか唯物史觀なるものが現はれたのであります。しかし社會はもと／＼一體であります社會の現象は種々に分化しながら相互に連絡がある。すべては一物の表裏であり、その間には因果の關係がある分化されながらも一體となつて進むで行く。これが社會の實情であります。〔未完〕